

号外

国木田独步

青空文庫

ぼろ洋服を着た男爵加藤かとうが、今夜もホールに現われている。彼は多少キじるしだとの評がホールの仲間にあるけれども、おそらくホールの御連中にキ的傾向を持つていないかたはあるまいと思われる。かく言う自分もさよう、同類と信じているのである。

ここに言うホールとは、銀座何丁目の狭い、窮屈な路地にある正宗まさむねホールの事である。生さいつぽん一本の酒を飲むことの自由自在、孫悟空そんごくうが雲に乗り霧を起こすがごとき、通つうりき力

を持つていたもう「富豪」「成功の人」「カーネギー」「なんとかフェラー」、「実業雑誌の食くい物」の諸君にありてはなんでもないでしょう、が、われわれごときにありては、でない、さようでない。正宗ホールでなければ飲めません。

感心にうまい酒を飲ませます。混成酒ばかり飲みます、この不愉快な東京にしなければならぬ。不ふしあわせ幸な運命のおたがいに取りては、ホールほどうれしい所はないのである。

男爵加藤が、いつもどなる、なんと言うてどなる「モー一本」と言うてどなる。

彫刻家の中倉の翁が、なんと言うて、その太い指を出す、「一本」

ことごとく飲み仲間だ。ことごとく結構！

今夜も「加かと男だん」がノツソリ御出張になりました。「加と男」とは「加藤男爵」の略称、

御出張とは、特に男爵閣下にわれわれ平民ないし、平ザムライどもが申し上げ奉る、言葉である。けれどもが、さし向かえば、些の尊敬をするわけでもない、自他平等、海藻のつくだ煮の品評に余念ありません。

「戦争がないと生きている張り合いがない、ああツマラない、困った事だ、なんとか戦争を始めるくふうはないものかしら。」

加藤君が例のごとく始めました。「男」はこれが近ごろの癖なのである。近ごろとは、ポーツマウスの平和以後の冬の初めのころを指さす。

中倉先生は大の反対論者で、こういう奇抜な事を言った事がある。

「モシできる事なら、大理石の塊のまん中に、半人半獣の二人がかみ合っていると、膨つてみたい、塊の外面にそのからみ合った手を現わして。という次第は、彼ら争闘を続けている限りは、その自由をうる時がない、すなわち幽閉である。封じかつ縛せられているのである。人類相争う限り、彼らはまだ、その真の自由を得ていないという意味を示してみたいものである。」

「お示しなさいな。御勝手に」「男」は冷ややかに答えた事がある。

そこで「加と男」の癖が今夜も始まったけれど、中倉翁、もはや、しいて相手になりた

くもないふうであつた。

「大理石の塊かたまりで彫つてもらいたいものがある、なんだと思われます、わが党の老美術家」、加藤はまず当たりました。

「大砲だろう」と、中倉先生もなかなかこれで負けないのである。

「大違いです。」

「それならなんだ、わかつたわかつた」

「なんだ」と今度は「男だん」が問うている。

二人の問答を聞いているのもおもしろいが、見ているのも妙だ、一人は三十前後の瘦やせがたの、背の高い、きたならしい男、けれどもどこかに野人ならざる風貌ふうぼうを備えている、しかしなんとという乱暴な衣装みなりだろう、古ぼけた洋服、ねずみ色のカラー、くしを入れない乱髪らんぱつ！ 一人は四十幾歳、てつぺんがはげている。比ぶればいくらか服装なりはまさっているが、似たり寄つたり、なぜ二人とも洋服を着ているか、むしろ安物でもよいから小ザツぱりした和服のほうがよさそうに思われるけれども、あいにくと二人とも一度は洋行なるものをして、二人とも横文字が読めて、一方はボルテータとか、ルーソーとか、一方はラファエルとかなんとか、もし新聞記者ならマコーレーをお題目としたことのある連中であ

るから、無理もない。かく申す自分がカーライル！ すみのほうににやりになり笑いながら、グビついているゾラもあり。

綿貫博士わたぬきはかせがそばで皮肉を言わないだけがまだしも、先生がいると問答がことさらにこみ入る。

「わかったとも、大わかりだ、」と楠公なんこうの社やしろに建てられて、ポーツマウス一件のために神戸市中こうべをひきずられたという何なん侯爵こうしゃくの銅像を作った名誉の彫刻家が、子供のようになわめいた。

「イヤとてもわかるものか、わたしが言いましうか、」と加と男かだん。

「言うてみなさい」と今度はまた彫刻家のほうから聞く。

「僕が言うて見せる」とついに自分が口を入れてお仲間にはいった。

「なんです」男だんが意味のない得意の声をいだした。

「戦争いくさの神を彫ってくれろと言うのでしよう」

「大ちがい！」

「すなわち男爵閣下の御肖像を彫ってくれろと言うのでしよう」

「ヒヤヒヤ、それだそれだ、大いに僕の意を得たりだ、中倉さん、全く僕の像を彫っても

らいたいのです、かく申す『加と男』その人の像を。思うにこれは決して困難なる業ぎようでない。このごとくほとんど毎晩お目にかかっているのだから、中倉君の眼底には、歴然と映
 刻せられておるだろうと思う。」

「そして題して戦争論者とするがよからう。」と自分が言う。

「ま敗いくさけ戦の神と言うほうが適当だろう」と中倉先生はまた、自分が言わんと欲して言うあ
 たわざる事を言う。

「題は僕自身がつける、あえて諸君の討論をわずらわさんやだ、僕には僕の題がある。な
 にしろ御承諾を願いたいものだ。」

「やりましょうとも。王侯貴人の像をイジくるよりか、それはわが党の『加と男』のため
 に、じゃアない、ためにじゃアない、「加と男」をだ、……をだをだ、……。だから承知
 しましたよ。承知すけの助だ。加と公の半身像なんぞ、目をつぶってもできる。これは面黒おもくろ
 い。ぜひやってみましょう、だが。」先生、この時、チョイと目を転じて、メートルグラ
 スの番人を見た、これはおかわりの合図。

「だが、……コートツト、（老人は老人らしい、接続詞をつかう。）題はなんといたしまし
 よう、男的閣下。題は、題は。」

「だから言うじやアないか、題はおれが、おれが考えがあるから可エと言うに。」

「エーと仰せられましても、エーでござせんた。……めんどくせえ、モーやめた。やめた、……加と男の肖像をつくること、やめた！ ねえ、そうじやアないか満み谷つたの大将」と中倉先生の気炎少しくあがる。自分が満谷である。

「今晚は」と柄にない声を出して、同じく洋服の先生がはいつて来て、も一ツの卓に着いて、われわれに黙礼した。これは、すぐ近所の新聞社の二の面の（三の面の人は概して、飲みそうで飲まない）豪傑兼愛あい嬌きょう者ものである。けれども連中、だれも黙礼すら返さない、これが常例である。

「そうですとも、考えがあるなら言つたがいいじやアないか、加藤さん早く言いたまえ、中倉先生の御意ごいに逆ろうては万事休すだ。」と満谷なる自分がオダテた。ケシかけた。

「号外という題だ。号外、号外！ 号外に限る、僕の生命は号外にある。僕自身が号外である。しかりしこうして僕の生命が号外である。号外が出なくなつて、僕死せりだ。僕は、これから何をするんだ。」男の顔には例の惨痛の色が現われた。

げにしかり、わが加藤男爵は何を今後になすべきや。彼はともかくも、衣食において窮するところなし。彼には男爵中の最も貧しき財産ながらも、なおかつ財はこれあり、狂的

男爵の露命をつなぐ上において、なんのコマルところはないのであるが、彼は何事もしていない。

「ロシヤ征伐」において初めて彼は生活の意味を得た。と言わんよりもむしろ、国家の大難に当たりてこれを挙国一致で喜憂する事においてその生活の題目を得た。ポーツマウス以後、それがなくなつた。

かれ男爵、ただ酒を飲み、白眼にして世上を見てばかりいた加藤の御前ごぜんは、がっかりしてしまつた。世上の人はことごとく、彼ら自身の問題に走り、そがために喜憂すること、戦争以前のそれのごとくに立ち返つた。けれども、男だんは喜憂目的物を失つた。すなわち生活の対手たいしゅ、もしくはままと、あるいは生活の扇動者を失つた。

がっかりしたのも無理はない。彼の戦争論者たるも無理はない。

「号外」、なるほど加藤男の彫像に題するには何よりの題目だろう、……男爵は例のごとくそのポケットから幾多の新聞の号外を取り出して、

「号外と僕に題するにおいて何かあらんだ。ねえ、中倉さん、ぜひ、その題で僕を、一ツ作つてもらいたい。……こんなふうに読んでいるところならなおさらにうれしい、」と朗読をはじめめる。

第三報、四月二十八日午後三時五分発、同日午後九時二十五分着。敵は鬩河右岸に沿い九連城以北に工事を継続しつつあり、二十八日も時々砲撃しつつあり、二十六日九里島対岸においてたおれたる敵の馬匹九十五頭、ほかに生馬六頭を得たり——

「どうです、鴨緑江大捷の前触れだ、うれしかったねえ、あの時分は。胸がどきどきしたものだ」と、さらに他の号外に移る。

——戦死者中福井丸の広瀬中佐および杉野兵曹長の最後はすこぶる壮烈にして、同船の投錨せんとするや、杉野兵曹長は爆発薬を点火するため船艙におりし時、敵の魚形水雷命中したるをもつて、ついに戦死せるものごとく、広瀬中佐は乗員をボートに乗り移らしめ、杉野兵曹長の見当たらざるため自ら三たび船内を搜索したるも、船体漸次に沈没、海水甲板に達せるをもつて、やむを得ずボートにおり、本船を離れ敵弾の下を退却せる際、一巨弾中佐の頭部をうち、中佐の体は一片の肉塊を艇内に残して海中に墜落したるものなり——

「どうです、聞いていますか」と加藤男爵は問えど、いつものことゆえ、聞いている者もあり、相手にせぬ者もある。けれども御当人は例によって夢中である。

「どうです、一片の肉塊を艇内に残して海中に墜落したるものなり——なんとという悲壮な

最後だろう、僕は何度読んでも涙がこぼれる」

酔えいが回まわって来たのか、それとも感慨に堪えぬのか、目を閉じてうつらうつらとして、体をゆすぶっている。おそらくこの時が彼の最も楽しい時で、また生きている気持ちのする時であろう。しかし、まもなく目をあけて、

「けれども、だめだ、もうだめだ、もう戦争いくさはやんじやった、古い号外を読むと、なんだか急に年をとってしまったって、生しょうが涯がいがおしまいになったような気がする、……」

「妙、妙、そこを彫るのだ、そこだ、なるほど号外の題はおもしろい、なるほど加藤君は号外だ、人間の号外だ、号外を読む人間の号外だ」と中倉翁は感心した声を出す。

「そこと言うのは」加藤男が聞く。

「そことは君が号外を前へ置いてひどくがっかりしているところだ」

「それはいけない、そんな気のきかないところは御免をこうむる。——」と彼かの暗記しおる公報の一つ、常に朗読というより朗吟する一つを始めた、「敵艦見ゆとの警報に接し、連合艦隊は直ちに出勤これを撃滅せんとす、本日天候晴朗なれども波高し——ここを願います、僕はこの号外を読むとたまらなくうれしくなるのだから——ぜひここをやってくださいな。」

中倉先生微笑を含んでしばし黙っていたが、

「それじゃア、君に限った事はない。だれでも今の公報を読めば愉快だ、それを読んで愉快な気持ちになっておるところなら平凡な事で、別にこの大先生を煩わすに及ぶまいハ、ハ、ハ、」

「なぜだ、これはおかしい、なぜです。」と加藤号外君、せきこんで詰問に及んだ。

「号外から縁がなくなつて、君ががっかりしておるところが君の君たるところじゃアないか。」

「大いにしかりだ」と自分は賛成する。

「それじゃア諸君は少しもがっかりしないのか」と加藤君大いに不平なり。

「どうだろう？　満みつたに谷君、」と中倉先生も少しこの問いには困つたらしい。自分も即答

はしかねたが、加藤男爵の事についてかねていくらか考えてみた事のあるので、

「そうですね、まるきりがっかりしないでもないだろうと思う、というわけは、戦争最

中はお互いにだれでも国家の大事だから、朝夕これを念頭に置いて喜憂したのが、それがおやめになつたのだから、気抜きの体ていにちよつとだれもなつたに相違ない、それをがっかりと言えばがっかりでしょう。」

「そら見たまえ、僕ばかりじゃアない、決してない、だから、喜んでいるところを彫るのが平凡ならばだ、がっかりしているところだって平凡だろう、どうですね、中倉の大先生、」と「加と男」やや得意なり。

「だって君のようなものもない、君は号外が出ないと生きている張り合いがないという次第じゃアないか。」と中倉翁の答えすこぶるよし。

「じゃ僕ががつかりの総代というのか」と加藤男また奇抜なことをいう。

「だから君はわれわれの号外だ。」と中倉翁の言、さらに妙。加藤君この時、椅子いすから飛び上がった、

「さすが、中倉大先生様だ、大いによからう、がっかりしたところ、大いによからう、ぜひ願います、題して号外、妙、妙、」と大満足なり。

それから一時間ばかり、さらに談じかつ飲み、中倉翁は一足ひとあしお先に、「加と男」閣下はグウグウ卓にもたれて寝てしまったので、自分はホールを出た。

銀座は銀座に違いないが、なるほどわが「号外」君も無理はない、市街までがっかりしているようにも見える。三十七年から八年の中ごろまでは、通りがかりの赤の他人にさえ言葉をかけてみたいようであつたのが、今ではまたもとの赤の他人どうしの往来になつて

しまった。

そこで自分は戦争いくさでなく、ほかに何か、戦争いくさの時のような心持ちにみんながなって暮らす方法はないものかしらんと考えた。考えながら歩いた。

(完)

青空文庫情報

底本：「号外・少年の悲哀 他六編」岩波文庫、岩波書店

1939（昭和14）年4月17日第1刷発行

1960（昭和35）年1月25日第14刷改版発行

1981（昭和56）年4月10日第34刷発行

入力：紅 邪鬼

校正：LUNACAT

2000年8月21日公開

2004年6月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

号外

国木田独歩

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>